

●春日部市民文化講座（第 13 回）

「千利休のもてなしの心 ～戦国武将はなぜ茶の湯に熱心だったのか 第 3 回 大友宗麟の信仰と茶の湯」

◆日時：2014 年 10 月 8 日(水) 11 時（ぽぽら春日部 4 階会議室）～12 時

■高山右近が近々“福者”に！

実はバチカンの発信なのですけれども、バチカンの信徒を顕彰するものに 2 つ“聖人”と“福者(ふくしゃ)”とあるのですけれども、来年あたり高山右近がこの“福者”の称号を与えられる可能性が高いのです。“聖人”になるためにはカトリック教会が定めたある重要な“奇跡”を行っているかどうか一つ、もう一つはどのように模範的な信者であったかが厳密に調べられるのです。それから今日のテーマの大友宗麟の領地であった臼杵(うすき)で、キリシタン禁教になっている頃、江戸時代初期にマレガという宣教師が日本でご奉仕されていました。このマレガという方は秀でた方だと思いますが、当時の日本にあった古文書、またイエズス会への報告書などを含めて膨大な量の資料をバチカンに持って行っているのですよ。それが数年前に発見され、これからが面白くなるかも知れません。

■遠藤周作が書けなかった「高山右近」

ぼくが高山右近を研究しているときに、まずは小説を読んで心を動かされたいと思って、遠藤周作の『沈黙』を読み直したりしました。遠藤周作さんがお元気な頃、講演の中で高山右近の小説を書いていない理由をポロッとおっしゃったのです。「高山右近は私の掌(たなごころ)に乗って遊ばしてくれないんだ」って。ぼくは、今になって思うと遠藤周作さんという方はとても真面目な方だったのですが、その上をいっちゃったのが高山右近だったのだと思います。だから、遠藤さんが描いちゃったら失礼なのかなあ…と彼の謙虚さから描けなかったのだらうと思います。その遠藤周作さんたちによって信仰に導かれた加賀乙彦さんと、ある講演会のあとでお話をさせていただいたのですが、「親友の遠藤周作が描けなかったんだから、ぼくが高山右近を描かなくてはと思ったのが動機かな」っておっしゃっていました。

■3の顔を持つ大友宗麟

もともと大友家は鎌倉時代から豪族として活躍し、蒙古襲来ということで九州に移動した家柄なのです。だから戦国時代にのし上がった秀吉とは全く違う家柄なのです。そして、大友宗麟は九州豊後府内、現在の大分市で生まれるわけです。あのね、大分の駅を降りると大友宗麟像がぶわわわんとあるのね【写真】、それは武将大友宗麟です。もう一つはキリシタン大友宗麟像、さらに死んだ所では、お茶人といえるようなスタイルの大友宗麟像があります。



■複雑な家庭で育った大友宗麟！

大友宗麟は豊後の殿様です。当時は島津藩よりも元気があったのですよ。だから彼については、こういう言い方がされています『九州の覇王』。でも島津藩にだけは最後まで悩まされましたね、だから島津藩に悩まされたことが、彼がキリシタンになったきっかけではないかと彼の流れの中で感じられます。1530 年は大友宗麟の生まれた年です。彼のお父さんの義艦(よしあき)という人は、力のあった人なんですけど、大友家を調べてみたら、ぼくは大友家に生まれなくて良かったと思いました。何故かと言うと、お父さんの義艦を殺したのは、宗麟こと義鎮(よししげ)かも知れないのです。宗麟というのは禅宗の法号というものです。仙台藩の伊達政宗が家督争いで悲惨であったように、九州の大友家も家督争いが複雑に絡み合っているのです。大友宗麟が一番苦労したのは、領地の侵略や戦ではなく、奥さんなのです。でも、その奥さんが宗麟にとっては反面教師であったと思いますよ。その奥さんには、イザベルというあだ名がイエズス会の宣教師たちによって付けられているのですけれども、本名は全く分かっていません。少年時代の宗麟は、家の中で傷つけられていて、たくさんのトラウマを持った人なのです。織田信長って変な人だって言いますが、大友宗麟も良く似ています。異母兄弟で争ったりとダブるんですね。

■大友宗麟とキリスト教との出会い

大友宗麟は心が荒れて育ちました。そういう中で、19 歳のとき 1549 年にフランシスコ・ザビエルが日本にやってきました。21 歳のときに、大友宗麟は府内にザビエルを招きます。そして、このときにザビエルから物凄い影響を受けるのです。何の影響かというとなんか人格的な影響です。彼がそれまでに会ったことのない人間としての影響でした。ちょっと結論的な話になりますが、そのザビエルとの出会いから 27 年後、1578 年に彼は洗礼を受けるのです。その間、何をしていたかという命を賭けた真剣勝負をしていたのです。大切な家老も戦死してしまいますし、九州の下克上は凄かったのです。さらに南の島津藩との死闘だったのです。ですから、彼には休む暇が無かったのです。九州のある大名の家老は茶の湯三昧なんですよ、1 か月に 10 日間もお茶事をやっています。暢気なお稽古ではなく、「お茶事をしなければやっていられないよ」と物の本に書いてあるぐらいに渴いていたのです。

じゃあ、洗礼を受けるまでの 27 年間、何をしていたかという、大徳寺のお坊さんと呼んで「寿林寺」(しゅりんじ)という禅寺を造るのです。そのときに大徳寺から来てくれた僧侶は**怡雲宗悦**(いんそうえつ)という方でした。禅宗も無を目指しているじゃないですか、でも無を得られなかったのです。でも、大友宗麟はザビエルと会って、ザビエルって凄いなぁと感じていたのです。環境としては京都の文化も全部流れて来るような最高の所にいて、周りには一流の人たちに囲まれていましたから宗麟の感性は非常に豊だったと思います。

■大友宗麟の洗礼

大友宗麟という人は、本当に九州の大大名として苦勞に次ぐ苦勞、でも一番の苦勞は戦でしょうね。それから家庭的な奥さんとの関係、子供の教育です。でも、大友宗麟よりも早く子どもの方が先に洗礼を受けているのですよ。彼が禅に夢中になって修行をしているときに、長崎の大村純忠(おおむらすみただ)が大名として洗礼を受けています。だから九州の肥前、肥後の殿様たちはこぞってキリシタンになりましたね。大友宗麟が 43 歳(1573 年、天正元年)のときに、今まで続いて来た室町幕府が崩壊するのです。日本の下克上があらここで荒れてくるわけですが、その後、天正 4 年(1576 年)のときに彼は息子の義統(よしむね)に家督を譲ります。そして、宗麟 48 歳(1578 年、天正 6 年)にフランシスコ・カブラから洗礼を受けます。洗礼名がフランシスコと言い、ザビエルのフランシスコから取っています。ですから、21 歳でお会いしたフランシスコ・ザビエルのインパクトは消えていなかったのです。義鎮(よししげ)さんはフランシスコ・ザビエルの名を自分の洗礼名としたんです。宗麟は禅宗の名前ですからね。でも、現代では義鎮なんて呼ぶ人はいないですよ、大友宗麟ですね。でも面白いですよ、フランシスコ・大友宗麟っていうのは日本の文化だと思うのですよ。キリスト教の名前と禅宗の名前を大友で合わせて一緒に呼んでいるのですよ。笑い事でなく、これがぼくらの文化なのです。神徒であり、仏教徒であり、クリスマスはキリスト教徒になるのです。それで全然矛盾はないというのが私たちなのです。

■大友宗麟の戦と大砲

21 歳から 48 歳の洗礼を受けるまで、彼は武将ですから、戦うことが職業ですから、大砲の弾を打ち込むためには硝石が必要なのです。それをマカオの商人に届けなさいということを書いた文章が遺っています。硝石を輸入するんです。大友宗麟の戦の特徴は大砲だったのです。島津に攻められたときに、臼杵城ではその大砲が非常に友好だったのですが、大友宗麟の大砲[写真:フランキ砲、日本最初の大砲、臼杵城趾のレプリカ]というのは、後には使われなくなるんですよ。運ぶのが大変でしたから。



■キリシタンの国を造ろうとした大友宗麟！

多くの戦の中での苦悩が宣教師たちからイザベラ(旧約聖書に出て来る悪い女の代名詞)と名付けられた奥さんなのです。大友宗麟は洗礼を受けてから、宣教師たちが使う西洋楽器による音楽を聞く機会が増えるのです。スペイン語の音楽「ムジカ」です。そして、現在の宮崎県(日向国)の延岡市を大友宗麟は無鹿(ムジカ、賛美の国)と呼ばせるのです。この頃から大友宗麟にとっては、ある夢があったようです。それは、宣教師から西洋の風を九州の地で受けて「ぼくはこの豊後の国をキリシタンの国にしたい」というものでした。彼はたぶんコンスタンチヌスのことを知っていたのだと思います。コンスタンチヌスは、ただのローマの王様だったのですが、洗礼を受けて教会に従うようになって「聖人」となった人なのです。だから「私はコンスタンチヌスのような国を造りたい」と言っているのです。そして、何と長男・義統(よしむね)が洗礼を受けたときの名前は「コンスタンチヌス」なのです。もうそのころから彼は、そういうことをイメージしていたのだと思います。そして、豊後国はキリスト教文化の国になりました。西洋医学による病院ができ、孤児院ができるのです。

■大友宗麟と利休さんの出会い

大友宗麟は秀吉の権力の凄さを九州で感じ取るのです。そして、宗麟は天正 14 年(1586)に病気をおして大坂城にて秀吉に謁見するのです。遠藤周作の『王の挽歌』の中では、大友宗麟が秀吉と謁見するのが黄金の茶室になっていますが、そこで秀吉から「内々のことは利休に、公のことは秀長に」という歴史的な言葉を聞くのです。その感動を宗麟は、その日のうちに九州の家老宛の書状に認められています。その頃の利休さんは、秀吉が関知しなくても内政のことは仕切る力を持っていたということなのです。そういうことを聞いて、大友宗麟は「ああ、利休さんという人は…」と感じたのです。

■大友宗麟の死

大伴宗麟の墓は津久見市にあります、禅宗を学んだ人として、京都の大徳寺瑞峯院にも墓があります。

大友宗麟という武将について初めてお話を伺うことができ、今までもっていたイメージが変わりました。